

修得の4段階と身体を通じた深い学び

—与那国島の子どもたちの事例より—

緒方良子

北九州市立大学大学院社会システム研究科

地域コミュニティ専攻

要旨

本研究では、沖縄県の与那国島を調査地とし、伝統芸能に深く関わっている家族のもとに住み込みで生活した。調査から得られた3人の子どもたちの修得事例から、ヒトはどのように学び、どのように知識や技能を修得するのかについて、学修の場である実践共同体の視点から学びの段階と身体性について考察する。

まず学修とはなにかについて述べていくうえで、環境と関わる過程を学修とみなす状況的学習を、論理的背景に据える。また、学修の場を含む知識や技術が継続的に実践される集団を実践共同体と呼び、実践共同体を「家族集団」「友達集団」「地域集団」の3つに分類した。事例を整理すると、修得過程には段階がみられ、4段階に分けて考えることができた。第1段階を「場の共有」とし、第2段階を「模倣と反復」、第3段階を「理解と獲得」、そして第4段階は「応用と創発」とした。これらを「修得の4段階」と名付けた。

この「修得の4段階」には、「学修」的な要素と「教示」的な要素が混在していた。学修は、学修者が主体的に学ぶとし、暗示性が高く学修することへのモチベーションが必要となる。一方、教示では他者から教わることが多く、言語との結びつきも強いいため明示的である。

身体性という視点をもってこれらを考えたとき、学修では、学修者の身体と社会環境や自然環境は密接につながり相互に作用しあっていた。豊かな社会環境や自然環境をもつ与那国島において、子どもたちは、誰かに教えてもらうような教示ではなく、自在性の高い学修をおこなっていた。社会環境や自然環境から、主体的に学修を進めていくには、子どもたちの身体を通じることが不可欠である。身体性と社会環境や自然環境の相互作用により、学修者のモチベーションは維持され、教示されることなく学修が深められていた。

キーワード：非言語、身体性、修得、教示、学修、社会環境と自然環境、修得の4段階、子ども、自在性、文化資源、模倣、創造、創発、遊び、相互作用